

「活動の力強さに希望を抱く」

5B06032 浅野泰世

本日お話を伺い、ワクチン被害に苦しむ方々への支援が、力強く始まろうとしていることに感銘を受けました。

お嬢様の症状を細かく書とめ、ブログで発信なされた”母の力”の偉大さ。松藤美香先生は、お嬢様の苦しみから、同じ苦しみを抱えた多くの少女たちとご家族の苦しみを思い、それを社会に向けて訴えてゆくことを決意なさいました。

これまで、薬害の問題が起こると、被害者・遺族・支援する弁護士と、製薬企業・国の対立が浮かび上がるという印象を持っていました。

HPV ワクチン問題では、市議員であられる池田利恵先生が、「全国子宮頸がんワクチン被害者連絡会」の活動を指導されていることが、被害者運動の力強さにつながっていると感じました。特に先生が、国内のみでなく海外の被害者とも手を携えようとされていることが「WHO は推奨している」と言って、ワクチンの定期接種の推奨を再開しようとしている勢力に対抗するために大きな力となるのではないのでしょうか。

「官僚を動かせるのは国会議員」という、ゆき先生のお言葉が示すように、保岡興治議員の影からの助力が、被害者の救済を加速させるために大きな力となっていることもわかりました。

「このワクチンによる症状は非常に特異、親や本人の生活が破壊される。診た医者は既存の病気に当てはめて治療しようとする。その中で残念なのは、心因反応、学校に行くのが嫌なのでそんなことを言っている。全症状の実態をつぶさに見ないと、副反応の実態はわからない。」

先生のご指導によって、厚労省の担当課長が、全国を回って患者に向きあったことが、少女たちやご家族の救済を大きく前進させるに違いありません。

被害者の救済は最優先で成されなければならないことで、その方向に向けて動きが始まったことは、とても喜ばしいことです。しかし、このような被害をこれ以上出さないことが重要です。現在厚労省は、「HPV ワクチンの定期接種を積極的に推奨すべきではない」という勧告を出していますが、定期接種が廃止されたわけではありません。廃止こそが求められますが、そこには多くの困難があるように思います。

- 1、定期接種を廃止することは、国の政策が誤りであったことを認めることになる。
 - 2、WHO が推奨していることをはじめ、諸外国では問題となっていないと考えられている。
 - 3、ワクチン接種に伴う症状とワクチンの因果関係を科学的に証明することは難しい。
 - 4、社会のワクチンの危険性に対する認識は、政策を変えるほどには成熟していない。
- 推奨の再開を後押しする理由はいくつもあり、それ等の多くは、日本において、諸外国以上に薬害の被害を大きくしてきた理由ではなかったでしょうか。

お三人の先生方のお話を伺い、「全国子宮頸がんワクチン被害者連絡会」の力強い活動を教えていただき、皆様方であれば、多くの困難をのり越えて、HPV ワクチンの定期接種を廃止に追い込むことが出来るのではないかという希望を抱きました。是非それを実現し、そのことによって、HPV ワクチンの定期接種化の過程で成された、様々なおかしなことを社会に問うて頂きたいと願います。

それは、HPV ワクチンによって苦しむことになる少女たちを救うのみではなく、今後新たに起こりうる薬害を、未然に防ぐことにつながると思うのです。

素晴らしいお話をお聞かせ頂きましたことに、心より感謝申し上げます。